

## 理論社会学の将来？

—農村社会学はどうなったか？

かつて助手をやっていた頃、長老の T 先生が言っていたことがある。「農村、漁村がどんどんなくなり、農村社会学や漁村社会学というのがなくなっていく。現在、私の主要な関心は社会福祉だ」、そして「家族も消えていく」と。

社会福祉の社会学が現在展開されているとは思わない。むしろ、社会学とは別の流れで、この分野は存在しているように思う。しかしながら、農村社会学がもうないとは言えないが、その流れは、地域社会学や環境社会学の中に見ることができる。家族社会学もそれだけをただ専門としている研究者がいないのも同じことであろう。これらの領域も、きわめて厚みのある研究が蓄積されていっている。私も、それらの末端かつ周縁会員として学会成果を共有させてもらっているが、こういう変化、とりわけ自律的な変化は何をやるにも重要であった。

さて、理論社会学は？ かつて東京大学出版会から『社会学講座 1 理論社会学』というのも出版されていて、その時代には飛ぶ鳥を落とすほどの勢いがあったが、今や消滅した。社会学史についても、社会学史学会というのがあり、私はここ 15 年欠席し続けであるが会員ではあるし、ここで出来た人間関係は今も続いている。しかしながら、社会学史というのには、歴史家になるのと同じで、ある一定程度の蓄積が必要であり、あまりに若い時から、社会学史、社会学史・・・というのをおかしいと思っている。ただ、これは私の思いではあるが。

しかし、かつて新明社会学について、その正嫡門下生のひとりが、「社会学史」や「理論社会学」というのは「社会学」「学」じゃないかと、『年報 社会学史研究』に書いたことがある。この戒め、警鐘は、その後、あまり顧みられず、今に至っている。つまり、社会学史という領域も、実はもうすでに絶滅していったと私には見えるからである。

社会学史だけを、それ以外とは区別して

取り出すことは無理である。私のシュッツやハイエクについての書物は、そういうことを思い続けて、かなり長い時間をかけて仕上げたものである。こういう作業は、どうしても 10 年単位となる。この種の仕事は、若い大学院生が、ただちにやるには無理がある。とりわけ、基礎的な知識の習得、そして読書量においても、20 年前と現在では、大学院生の素養に大きな差を感じることを思うと、たいへん難しい。また、学際的展開が広範囲となり、私のいる早稲田大学文化構想学部でも、社会学の領域を超えた範囲での学部教育が前提となっている。

理論社会学と称して、「フーコー」「デリダ」「ハーバーマス」などと社会学・学は、かつての社会学の蜻蛉領域ではやっていけたが、フランス文学、ドイツ文学などの思想史研究をしていく人たちとは、社会学プロパーでやっている人とは、その素養の差、そして何より外国語能力の歴然たる差を感じる。かなり心して留学をして、その研究対象についてと、その周辺を学んでいく必要がある。社会学が、気楽な領域として、人気学科となっていたことは事実であるが、これからこの領域、とりわけ理論、思想、歴史にかかわる部門については、社会学の出身者、とりわけ理論社会学や社会学史を専門としてきたという人たちは、残念ながら駆逐されていくだろうと私は考えている。それくらい自力がないと私は見ている。

農村社会学が、地域社会学、環境社会学へと変態していったように、理論社会学は、人の名前という固有名詞を口にするだけのコケ脅しから脱皮して、新しいフィールドで活躍する必要がある。もう日本語で書くのはほどほどとして、理論社会学の研究論文は英語で書き、海外で活躍すること、おそらくこれだけしか、理論社会学者、社会学史研究者で生きる道はないであろう。

2008年1月15日

早稲田大学文学学術院・文化構想学部  
森 元考